

## 巻頭言 アカデミズムとアクティヴィズム

澤田稔

本研究所の目的は、その公式ウェブサイトにて、「上智大学の建学精神に基づいて、人間の尊厳と連帯を脅かすようなさまざまな問題をグローバルの視点から研究し、その成果をもって学生や社会に意識化の場を提供し、さらに変革のための実践を通じて世界のひとびとの尊厳と連帯を実現する人材を養成すること」と記されている。改めて注目しておきたいのは、ここに、学術的な研究・啓蒙活動にとどまらず、「変革のための実践」をも自らの取り組みの中に位置付けている点である。つまり、この研究所においては、アカデミズムだけでなくアクティヴィズムをもその活動のバックボーンに据えることが、その設置趣旨で宣言されているのである。

言うまでもなく、学術研究機関が社会的・政治的問題に関するアクティヴィズムを標榜する必要はない。それだけに、本研究所があえてそうした志向性を選択しているという点は、その重要な特徴の1つだと言えよう。この点が本研究所の研究紀要である本誌にも体现されており、本号もその例外ではないことが、目次を一瞥していただくだけでも明らかになる。

しかしながら、こうした姿勢は、単に本研究所が自覚的に選択したものというだけではなく、後期近代における社会諸科学のおかれた状況とも明らかな関連がある。たとえば、日本を代表する社会学者の一人、盛山和夫は、現代社会が直面している様々な危機——すなわち、ベック(Beck, Ulrich)がリスク社会という概念で捉えようとしたような、人間社会がよかれと考えて作り出した営みが私たち自身に跳ね返ってくることによって生じる「再帰性」を特徴とする危機的諸問題——を正面から見据え、そのより望ましい解決策としての新たな秩序構築に向けた「公共社会学」を構想する中で、社会学が取り組むべき課題を、「一次元的視座」及び「二次元的視座」に対する「三次元的視座」という観点で捉えている(盛山和夫・上野千鶴子・武川正吾編『公共社会学 [1] ——リスク・市民社会・公共性』東京大学出版会、2012年)。この観点は、アカデミズムとアクティヴィズムとの往還あるいは接合の必要性を私たちに再認識させることにつながるように思われるのである。

盛山の言う「一次元的視座」とは、社会問題を単に管理・制御の対象とみなし、それに対して科学技術やこれに基づく合理的な政府の政策によって対処可能と見るような機能主義的な構図で、これが近代国民国家による法制度や教育制度の確立、経済の発展、社会保障制度の整備という諸過程を主導したのに対し、「二次元的視座」は、この構図に反旗を翻して、それが装う客観性の奥に隠された自文化中心主義を告発し、その「脱構築」によって一次元的視座が構築した秩序の抑圧・差別・権力などからの解放を企図するものであった。が、盛山は、後者の重大な欠陥として、前者に対する有効な代替選択肢の提示に失敗している点を

指摘する。「一次元的視座」は超越的であれ社会の秩序づけを目指したのに対し、「二次元的視座」はその超越性の批判的解体に終始したと。これに反して、社会に対し超越することなく、いかにして社会の秩序づけに参加しうるかという課題を引き受けるのが「三次元的視座」であり、この視座に立って社会問題にアプローチしようとするのが「公共社会学」の構想であるという。

ここで注意したいのは、盛山自身が喝破しているように、公共的により望ましい秩序の構想は常に不完全さやある種の偏りを伴うことになるという点である。とすれば、そこでは経験科学・規範科学の双方を含む学術研究だけでなく、現実的な社会秩序の再構築を目指す上で、具体的な「現場」におけるアクチュアルな試行錯誤や当事者・実践家・実務家との対話・コラボレーションといったアクティヴィズムの積み重ねとその反省もまた重要な意味を持つことになるだろう。本誌は、まさにこうした意味で、学術研究のみならず、そうしたアカデミズムとアクティヴィズムとの往還・接合を試みるフォーラムとしても捉えることが可能で、1~3号と同様に本号も、本研究所のそうした持ち味が存分に発揮された充実のラインナップとなっていると自賛してもお許しいただけるのではないだろうか。とはいえ、そこに見られる各試みが抱え込む不完全さや偏りの評価については、本誌を繙く読者の方々に委ねるしかない。様々なご感想や忌憚のないご批判をお寄せいただければ幸いである。

以下、そのラインナップを残された紙幅で瞥見しておきたい。

本号における「特集」2本のうち「特集1」は、パンデミックがもたらした社会問題に対して講じられた諸政策をジェンダーという視点から評価し直すという研究企画で、この問題に関連するいくつもの重要な切り口が用意され、それぞれを専門とする研究者や実務家の報告に基づくリレー報告となっている。きわめて充実した具体的なデータや現場の声に基づく議論により、パンデミック自体だけでなく、それに伴い講じられた諸施策によって生じた複合的なジェンダー格差・不平等問題に関する立体的理解が得られる貴重な報告集である。「特集2」も、パンデミックをモチーフとした企画だが、ここではその事態が浮き彫りにしたグローバル経済の脆弱さに鑑みて、ローカルなレベルでの共同体の再構築及び脱成長型経済の創成可能性を、事例研究を含めて探求するという意欲的で刺激的な試みである。

これら特集以外に2021年度に本研究所が実施した企画については「報告」で紹介されている。「社会的養護出身の若者の困窮リスクと支援制度」では、家庭で適切な養育を受けられず施設等での社会的養護を経験した若者が退所後の生活で直面するリスクのあり方を踏まえて具体的な支援上のポイントや課題が考察されている。「第41回 IGC-SSRI 国際シンポジウム 差別と心理学」は、内外から専門家や当事者・実践家らを招いて2日間にわたり開催されたオンライン・シンポで、マイクロアグレッションをメインテーマに据えて様々な種類の差別問題に関して考察を深める非常に充実した企画であった。ここでは、本研究所所属の企画者による企画概要と海外研究者による基調講演の文字起こし原稿が再録されてい

る。「『映画 太陽の子』上映会」は、二次大戦中に日本にも存在した原爆研究に巻き込まれた若者を描いた映画を鑑賞し、その監督とともに現代の核兵器問題を考えようと、本学学部生が中心に運営した企画で、報告も当該学生たち自身による。「みんなでつくる『被災者とコミュニティ』を中心にした支援入門！スフィア・スタンダード」は、人道支援上の国際基準として知られる *sphere standards* の入門的理解を目指して、海外だけでなく日本でも熊本震災時に支援活動に携わった実務家を招いて開催された。この報告は、この基準の意義に関する初歩的理解を得る貴重な契機を与えよう。「オンライン哲学対話は続く」は、本研究所でシリーズ化している名物企画「ソフィア哲学カフェ」に関する報告であるが、各回対話のテーマ紹介とともに、哲学対話の意義について改めて反省的に再考した報告内容も目を引く。

「資料」というカテゴリーに収められた2本は、ともにその言葉から連想される水準を遥かに超える密度の高い論考である。「『#入管被収容者にも生理用品を』プロジェクト」では、本学学部生がある授業の一環として、「生理の貧困」という概念を軸に、入管に収容されている当事者の声を聞きつつ進めたソーシャル・アクションの軌跡がまとめられている。「『ニュース女子』による人種差別裁判に対する意見書」は、学外からの貴重な寄稿で、東京メトロポリタンテレビジョンが放映した番組「ニュース女子」による名誉棄損を争点として起こされた裁判のために、2022年2月に東京高裁に提出された原告側意見書である。これは一審で扱われなかった当該番組の人種差別的な性格に関する、排外主義の社会学研究を専門とする寄稿者による意見文で、いわゆる「犬笛政治」の具体的な事例の理解に資する考察となっている。

これらの原稿が校了しつつある段階で、ロシアによるウクライナ侵攻というまさに人間の尊厳と連帯を踏み躪る事態が生じ、パンデミックにも増して大きなグローバル・コンサーンを私たちは抱え込むことになった。ようやく今号の発刊に漕ぎ着けたばかりだが、早くも次号に向けて漕ぎ出さなければならない。

澤田稔（さわだみのる）（グローバル・コンサーン研究所・上智大学総合人間科学部）